大学院：学校教育専攻，「学校現場での心理学的支援」

「院生とともに授業を創っていく試み」

学校教育講座　教育心理学教室　江上園子

＜授業の目的：シラバスより＞

現代の学校で子どもたちと教師および大人達が抱える知的、情緒的、社会的な課題を学校心理学の視点から捉え、実践的・臨床的な教育・発達の支援を行ううえで有益な問題理解、援助の視点について学ぶ。子どもの学校生活と教育に関わる種々の立場の自発性と連携について、チーム援助、コーディネーション、コンサルテーションという視点の理解を深める。また、学習指導領域と生活指導領域などの絡みについても考える。また、現職教員の事例をもとに、各自がこれまで学んできたことをもとに、討論を行えるようにする。

＜授業の到達目標：シラバスより＞

１．学校心理学の特徴とその目的について説明できる。２．学校心理学を具体的に実践する際の心理教育的援助サービスや、各種の活動（カウンセリング，コンサルテーション，アセスメント）について概要を理解できる。３．種々の実践事例に触れ、自分なりの学校現場での支援についてプランを描ける。

＜授業の概要＞

本授業は、全14回の授業であった（授業者が体調を崩し通院したため、やむなく休講を設けた。）受講者は６名である（すべて修士課程１回生うち現職教員の院生が１名）。講義形式の授業がほとんどであったが、うち一回は外部講師を招き、その他一回は、現職教員である受講者に学校現場での取り組みについての授業を依頼した。また、演習形式のものも二回取り入れた。

なお、本授業は、大学院としてはじめて設けられた科目であり、授業者としてもはじめて受け持つ科目であったことから、「院生とともに授業を創っていく」ということを念頭に置いていた。そのため、授業初回のガイダンスの際、「どのようなことをこの授業に求めているか」・「何についての知識を得たいか」というアンケートを行った。その結果をもとにして、授業を構成していった（もちろん、学校臨床心理士の資格認定との関係で、最低限押さえるべき授業内容はクリアした上である）。

＜授業評価アンケートの結果について＞

試験日を除く最後の講義の際、無記名式で授業評価アンケートを行った。質問事項とそれらについての回答内容は下記の通りである。

１.「この授業を受講して良かったと思いましたか。５件法（まったく思わない～とても思う）で答え、その理由も書いて下さい。」

この質問では、４（まあそう思う）：２名，５（とても思う）：４名という結果であった。理由としては、「自分の知らなかったことを知識として吸収することができ、またその知識は教師として大切なことであり、特別支援の面で言うといま注目されている内容だから。」「学校心理学や現場に活かせるカウンセリング、保護者対応などについて理論と演習の両面から学ぶことができ、今後に活かせそうだから。」「今までに習ったことのなかった内容を基礎の言葉から実践例や事例などまで授業で聴けたため。ワークも２回あり、充実した内容であったため。」などであった。

２.「この授業の内容をどの程度理解できましたか。５件法（まったくできなかった～かなりできた）で答え、その理由も書いて下さい。」

この質問では、３（どちらともいえない）：３名，４（まあできた）：３名という結果であった。理由としては、「講義をきいているときは理解したつもりでも、前の週の授業のことをうろ覚えだったり、忘れていたりがあったため。」「心理学

の用語を十分に理解するのが難しいと感じました。言葉ではわかっても、実感に伴って納得するというところまで理解するのは大変だと思いました。」や、「基本的なところを分かりやすくまとめて下さったり、具体例を挙げて説明・質問への応答をして下さったりしたので。また自分自身にもある程度基礎知識があったので。」というものであった。

３.「この授業を受けて、意味があった（役に立った）点はどの程度ありますか。５件法（まったくなかった～かなりあった）で答え、どういう点に意味があったか（役に立ったか）、具体的に書いて下さい。」

この質問では、４（まああった）：４名，５（かなりあった）：２名という結果であった。具体例としては「発達障害についてやカウンセリングなどについて様々な幅広い内容を取り上げていたため。」、「現場で子どもや保護者についてどのような態度で接するかということを具体的に考えることができたので、この授業で学んだことを活かしていけると思います。」や、「『子どもに限らず保護者も人として、保護者として成長している段階である』という内容では、あらゆる保護者‐教師観の事例など、なぜ保護者がそんなことを言うのか、『成長しきった人』という目では見なくなったこと。」などが挙げられていた。

４.「この授業で改善すべきところはどの程度ありますか。５件法（ほとんどない～かなりある）で答え、どこを改善した方がいいか、書いて下さい。」

この質問では、１（ほとんどない）：１名，２（それほどない）：２名，４（少しある）：３名という結果であった。改善点としては「授業で映されるスライドを書き写すのに必死で先生の話をあまり聞けなかったのが少し残念でした。」他類似意見３名,「ロールプレイが大変よい経験となったので、回数を増やしていただき、他のグループのロールプレイをみながら（またビデオ）振り返るとか、チーム援助のすすめ方のロールプレイもやってみるとさらによいのではないでしょうか？」，という意見があった一方で、「ノートを取るのが遅くて書き取れないときも、授業の最後でページを戻してくださるので、書き取ることができました。」という感想もあった。

＜今後の課題＞

本授業は「院生とともに授業を創っていく」という狙いのもと、授業を構成していった。初回の授業アンケートでは、特別支援教育についての講義や学校心理学における集団やチームの機能などについての講義が多く求められていた。そのため、特別支援教育については授業者の講義の他、特別支援教育コーディネーターを経験している現職教員大学院生による教育現場での話を聴く機会を設けた。さらに、学校心理学における集団やチーム機能などについては、やはり授業者の講義の他、そのテーマに詳しい外部講師を招き、特別講義を行った。その結果が、質問１の「この授業を受講してよかった」や質問３の「この授業を受けて、意味があった（役に立った）」という多くの感想にあらわれたことについては一定の評価を得られるだろう。

しかし、質問２の「授業の内容の理解度」については、思うような結果が得られなかった。教育心理学をベースにしている講義のため、受講生は学部時代にある程度の基礎知識を有していると想定していた。院生の現在の所属研究室が教育心理学関係でないことからも、院生の基礎知識をより正確に把握した上で、授業を行っていくことが今後、必要となるだろう。

また、質問４の「授業における改善点」についても、数名の院生から「スライドの配布願」という同様の意見を得られた。これについては、大学院の授業であること、配布すると授業への集中力が低下する可能性があること、という２点から配布をしなかった。しかしながら、この分野の初学者（あるいは学部時代の知識がうまく積まれていない者）が多かったことを考慮すると、スライドを配布してもよかったかもしれない。この点は、今後さらに検討を続けていく授業者の課題として掲げておきたい。